

# アロハトリス

阿羅本 景

「なあ、秋葉」

日曜日の朝の団欒。とは行ってもテーブルに着いているのは俺と秋葉だけ。琥珀さんは流しに食器を片付けにいつて、翡翠は立って朝食後の一杯を注いで回っている。俺の目の前にあるのは琥珀さんのブレンドのモーニング、アッサムに中国茶を少し混ぜてあるらしいミルクティー。

濃厚で目が覚めるような味がする。俺はずらず、とカップを啜る。  
だが、そんなお茶を飲んでも頭が重い。やたらに脱力感があって疲れるような……

「なんですか？ 兄さん」

で、秋葉の目の前にあるのは、クリスタルのカットグラスに注がれた真っ赤なワイン——  
いや、ワインにといったのは俺の願望の現れであり、そう思わないと精神の平静を保てない代物を秋葉は毎朝毎朝飲んでいるからだ。

その証拠に、給仕する翡翠が持っているのはラベルのあるワインボトルではない。プラスチックの輸血容器に、刺さったストロー。滴る真紅の血液。

「……毎朝飲んでるな、それ」

「はあ……輸血ですか？ それがどうかしましたか？ 兄さん」

けろっとした顔でとんでも無いことを言い返す秋葉。

なんとなのか、普通の人間は血液を毎朝の無という習慣がない、などと言うことを忘れてるのかのような素振りだった。どうも、過日の大活躍で頭の螺子がどこか緩んでいるのかも知れない。

——そんなこと、間違っても口に出せたものじゃないけども。

秋葉はクリスタルグラスに注がれた粘性の高い真紅の液をうっとり眺めると、ルージューも引いていないのに紅い唇に浸していく。くびり、とその喉が動く音が聞こえるような気がする。

「……そのスタイル、どうにかならんか？」

「はい？ 何と仰いました？」

「いや、その、だから、グラスにこれ見よがしに血液を注いで飲み干すという、ソムトウとかアン・ライスとかキム・ニューマンとかが喜びそうなスタイルは」

秋葉の影響で目を通すようになった吸血鬼小説の作家の名前を俺は口にしていった。まあ、そんな本を書斎から持ち出して「秋葉さまのこれからの参考に！」などという琥珀さんも琥珀さんだと思っただけ、今の秋葉は何とのか……

やはり、吸血姫というのだろう、血をこまで美しく美味そうに飲めるのは。

だが秋葉は秀麗な眉を動かすと、不満そうな顔つきになってグラスを下ろす。

「……前に兄さんは、輸血用血液バックからストローで啜るのはみっともないって言われたのでこのように」

「うん、あれはみっともなかった。でも、今のスタイルもちよっとイヤなものがあるな」

俺はなんとか冷静さを保ちながら話を続ける。血液の入ったグラスを持って嬌然と笑う秋葉の前に座っていると、立ち上がって逃げ出したくなる危険な気配に

襲われるからだ。この光景を毎日見るといのは、俺の中の七夜にズキズキくる。

「……はああ」

……なんか、身体が怠い。風邪でも引いたかな？

俺がのったりと紅茶を飲む間にも、秋葉はもはやこれ以上言っても無駄、と言いたげに軽く肩をすくめてグラスを再び手に取る。翡翠に注ぎ足されて、赤い液体が玻璃の器の中で怪しく輝いていた。

俺はまたじっと秋葉の口元を眺めていた。

「秋葉……それ……」

「？まだですか？兄さん」

「美味しいのか？」

偽らざる俺の疑問。かつてクラスメイトであり、死徒に堕ちた少女は血にも美味い不味いがあると言っていたが、秋葉も血を飲みながらそんなことを考えているのだろうか……上手く回らない俺の頭の中の問い。

秋葉はしばらくその答えに答えず、端から見ると——美味しそうに飲み干した。

秋葉はうっとりとしたような横顔を見せていたが、俺にうっすらと笑って向く

「ええ、やはり味が違います。ある日は苦かったりある日は甘かったり……きつと輸血の提供者によって違うんでしょうね」

「そっか……」

なんとなく酔った様な雰囲気、秋葉に、俺は生返事を返す。

俺は敢えて、あの日の校舎で生で秋葉は吸っていた事には触れないでいた。藪をつついてへびを出す気はない。まあ……味が分かるというのは秋葉も立派な吸血生物の一端ということか。

俺はカップを置いて、首筋を揉みながら部屋の中を眺める。秋葉は椅子に着いて軽く腕を組んで俺を眺め、翡翠はその後ろに控えている。琥珀さんも片づけが終わったらしく、手をエプロンで拭いながら食堂に姿を見せていた。

「うー……」

琥珀さんとの関係が始まってからの、久しぶりの貧血の感覚。

ちらと琥珀さんを見ると、僅かに首を傾げて俺の方を見つめている。心配させるのも悪いから、俺はすぐに頭を振って背筋を伸ばす。

「じゃあ、今日のそれは……」

「……今日の血は、特に美味しいです。兄さん……ええ、喻えるのならばそうですね、甘露のように」

「それはそうですよー」

琥珀さんがにこにこ笑いながら口を開く。

「だってそれ、志貴さんの血ですから」

ぶっ！

「ななな！なんだって！」

「琥珀っ！」

俺が飲みかけの紅茶を吹いて叫び、秋葉も顔色を変えて立ち上がる。その手にはしっかりとグラスが握られており、残り僅かになった血が波打っている。

琥珀さんは俺と秋葉の驚愕にも表情を崩さず、笑顔のまま俺の元にすすすと進み寄ってくる。

「ですので、今日の秋葉さまのお召し上がりになったのは志貴さまの……」  
「翡翠っ！これはどう言うこと？」

「いえ、その、厨房で姉さんに渡されたパックをお入れしたので……」

急に詰問の切っ先を向けられた翡翠が、珍しく慌てた口調で答える。

確かに朝食を用意するのは琥珀さんだから、そうなのもおかしくない……って、なんで俺の血を琥珀さんが持っているんだ？

俺は急いで立ち上がろうとして——立ちくらみを憶えてそのまま腰を下ろす。

……貧血？もしや……

「琥珀さん……もしかして……」

「すいませんー、志貴さま。秋葉さまのお食事の為に昨晚お休みの間に、ちよつと……」

「採血したのか？どのくらい？」

「はい、四〇〇ccほど……」

……それだけ抜けば貧血になるはずだ。元々血の量が多くないし、俺、  
というか、その、いきなりこれは一体……

「琥珀……これは一体どう言うこと？説明次第によつては……」

立ち上がったって琥珀を睨む秋葉。口元が引きつり髪が僅かに紅く燃えるように  
……いかに、本気か？

俺は立ち上がって琥珀さんを守ろうとするが、脚と身体は椅子に張り付いたま  
まだった。急いで見上げると、琥珀さんは——笑っていた。

本当に、楽しそうに。いや、なんで？琥珀さん

「……それはもう秋葉さまの食生活を慮りまして……」

「そんなことは聞いてません！そんな、兄さんの体調を守るべきあなたがそのよう  
な無体を働くのであれば……」

「そうですかね？でも、秋葉さまは志貴さまの血をお飲みになりたいと思つてらっ  
しゃつたではありませんか？」

いきなり切り込む琥珀さんの声。

秋葉は声を失ったかのように口を閉ざす。目は見開かれ驚きよりも内心を言い  
当てられたような羞恥の色が浮かぶ。見る見るうちに秋葉は真っ赤な顔でもじも  
じと……

「そんな……に、兄さんの血を飲みたいと思つた事なんて……」

「あるんですね？我慢ならぬ方がいいですよー、秋葉さまもいろいろご無理を  
されておられるのですし……それに……」

「……何よ、琥珀」

「先ほど仰いましたよね？志貴さまの血は美味しいと……」

う、と秋葉は追いつめられたような表情になる。立ったまま身体を硬直させて  
……一方の琥珀さんはゆったりと柳の様な柔らかい身のこなしで立っている。翡  
翠は一步離れて傍観モード、そして俺は椅子から立ち上がれない。  
秋葉がうつむき加減になると、琥珀さんの言葉が追い打ちする

「……秋葉さまったら、志貴さまの血をあんなに美味そうにお飲みになるとは  
……」

「ち、違うのよ琥珀、あれはその……」

「秋葉さまったら、志貴さんをそんな風にいつも……」

「そうか、美味しかったのか……それは光栄だな、秋葉」

何とか場を和ませようとして俺はこう言ったが、その言葉に秋葉はびくん、と反  
応する。顔を上げて助け船に縋り付くかと思いきや……

「ちっ、違うんです兄さん。私は兄さんのことを美味しそうだと思っただけのことか  
れっぽっちも！」

「じゃあ、飲みたいと思ったことはあるの？」

「う……そ、その、それは……」

なんか、秋葉を弁護するつもりが俺も琥珀さんの尻馬に乗ってしまったているか  
のようだった。琥珀さんが作る空気というのは、その場にいる人間の意志と裏腹に  
一つの対象に向かって……って、冷静に分析している場合じゃない。

俺は精一杯の笑顔を作ると、もじもじする秋葉に話しかける。

「……飲んでいいんだぞ、俺の血を。毎日困るけど」

「そ、そんな、私は兄さんの血を啜るはしたくない妹なんかじゃ……」

「無理しなくてもよろしいですよー秋葉様、はい」

いつの間にか翡翠から輸血バックを受け取ると、琥珀さんは握られたままの秋  
葉のグラスに注ぎ込む。粘性のある液体は静かにグラスの中に満ちて行く。

まるで飲み会の席のように、杯を握って注視を浴びる秋葉。

とりあえず秋葉はこのまましばらく動けそうにもなかった。

「しかし、まあ……なんで秋葉に俺の血を？琥珀さん」

「あはは……それはですね、志貴さま……」

琥珀さんは俺の方を振り返る。

「やはり、秋葉さまは遠野家の当主ですの？」

「ふんふん」

「食物連鎖の頂点に立っていただきませんと」

なにっ！

な、何を考えているんだ？琥珀さん？

——わからない

「しよ、しよ、食物連鎖！」

「はい、まず私から志貴さまへ……共感者として」

琥珀さんは自分の胸から俺の方を指し示す。そうだ、共感者の力がないと俺は秋  
葉との魂の関係でもともに生きて行くことが出来ない。そう言う意味では琥珀さ  
んから俺の間には力の関係があるが……

そして琥珀さんは、俺から秋葉へと腕を動かしてみせる。

「その志貴さまから秋葉さまに。これで見事、秋葉さまは遠野家の食物連鎖の頂点  
に立たれるんですねー、きゃ」

そういつて、ぱちん、と手を打ってうれしはずかしな素振りではしゃいでいた。

……俺はそんな琥珀さんを呆然と見守るだけだったし、秋葉も同じ様……

「琥珀？そんなことをしなくても私は兄さんの……」

「いやですわー、秋葉さま。そんな、共融での力の推移なんて面白くありませんー」

しれっとした顔で、またしてもとんでも無い事を口走る琥珀さん。

もはや、走り始めた琥珀さんの暴走は止まることなく……

「秋葉さまは遠野家の吸血鬼なのですから、やはり吸血鬼の美学に従って志貴さま  
の血をカッタグラスに注いで飲まれるような、耽美な世界でない駄目ですねー  
使用人と兄の血をすする少女吸血鬼の当主。ロマンですわー」

「……そうだった、たしか……」

これもまた  
**大自然  
の  
摂理**

(声:関口宏)



思い出した。

「輸血パックの直吸いをみっともないと言ったのは俺だったが、グラスを持ち出したのは確か琥珀さん……じゃあ、もしかして、今までのことは全部琥珀さんが……仕組んでいた？この日のために」

「……ははは……」

秋葉は、ぶるぶると瘡の様に震えだし、そのまままるで火酒でも飲むようにぐつとグラスを開けると――

あ、まずい、秋葉の奴……髪が紅い。キレル。

重い身体にむち打って立ち上がる俺に――

「琥珀っ！そんな下らないことのためにこの泥棒猫はっ！」

「きゃっ、お兄様の血を飲んで興奮するはしたない妹だって知られただけで秋葉さまだったら、ムキになられてっ！」

「今度はやはり我慢がなりませんっ、兄さんっ、その性悪女をかばわないでくださいっ！」

「落ち着けっ、秋葉っ！というか、そんな形相でこっちに来るなっ！」

「ごうごうごうっ」

俄にどたどたと始まる食堂の追いかけっ。

俺は必死に琥珀さんを追って逃げるが――

「申し訳ございませんが、秋葉さま、志貴さま」

追いかけてこの外にいた、翡翠の冷静な声が響き渡る。

突然の翡翠の声に、そろってびたりと足を止める俺と秋葉、それに琥珀さん。三人の視線に晒された翡翠は、いつもの生硬なその顔のまま……

「私は、その、遠野家の食物連鎖の何処に入るのでしょうか？」

……ボケ？

わからない――

「あ、それはねー翡翠ちゃん、翡翠ちゃんも秋葉さまに昔の私のように直接――」  
「くああああー全員そこを動かない！みんなして私を罵る気ですねっ、私をチュパカブラスとかチスイオオコウモリとかそんな呼び名を付けて！」

もはや憤激のあまり我を見失っている秋葉。

そんな秋葉に出来ることと言えば――これしかないじゃないか？

「逃げるぞ！」

「え？あ？志貴さまうきゃー！」

「翡翠ちゃん、こうやって私は昔から追いかけてっがしたかったんですよー」

「オニ、私をオニだっけ言いたいのね、琥珀うううう！」

ダッシュユ！

翡翠の手を掴んで駆け出す俺、手を叩いて走る琥珀さん。

「秋葉、いいじゃないか、食物連鎖の頂点、百獣の王らしく毅然としてー」

「兄さんまで私のことをお！」

「あははは、秋葉さまあ、オニさんこちら、手の鳴るほうへー」

《おしまい》